

ムープ叢書 ジェンダー白書7 KEKKON 結婚 — 女と男の諸事情



■ 濑地山 角、岩志 和一郎、浅野 富美枝、富永 桂子、川原 和子、石田 仁、白河 桃子、井戸 美枝、山下 ゆかり、香山 リカ、宮本 まき子、アーサー・ビードル、マルゴ・キャリントン、中嶋 公子、田村 慶子、渥美 由喜、キム・ヨンジュ、ジャンキアオ・グエ、セリーヌ・イ・シェン、樋口 里華、坂本 祐子 著
■ 北九州市立男女共同参画センター“ムープ”編
■ 明石書店
■ 2010年初版
■ 2,000円(税別)



結婚に関してさまざまな視点からの論評が集められた叢書である。そして、通読すると、総論で瀬地山氏が述べているように、結婚でさまざまな「きしみ」が現れ、意識が「さまよっている」様相が手に取るようわかる。

1970年以降の女性解放のながれは、従来型の結婚、特に、夫は仕事、妻は家事という性役割分業を前提とした結婚形態を批判し、富永氏が述べる「経済的にも生活的にも自立した2人の関係」とか「希望する人生選択肢が実現する社会」といった理想が語られてきた。

しかし、この20年の展開は、その理想が、現実の前に敗退していくプロセスであるようにみえる。経済的格差、特に、男女格差以上に、男性同士、女性同士の格差が目立つ時代になっている。自立した2人の関係どころか、従来型の性役割分業家族でさえ希望しても手に入らない現実が見えてきた。その中で、今後、結婚はどのような方向を辿るのかを考える上で、示唆に富む1冊である。

結婚を語る際に無視されがちな「もてる／もてない」に関する石田氏の考察や、世界各国の結婚事情の章が本書を更に豊かなものにしている。

婚 活

「結婚を目的とし、自分を磨いたり、結婚相手を探すために意識的に活動すること」。2007年11月白河桃子氏との会話の中で山田昌弘(筆者)が名付けた言葉。待っていれば自動的に結婚できるという時代ではなく、結婚するには意識的に活動することが必要な時代になったことを象徴させた言葉。しかし、メディアに浸透するにつれ、女性が「高収入の男性と結婚する方法」という形で誤解されることが多くなった。その経緯は、「婚活現象の社会学」(山田昌弘編)に詳しい。

やまだ まさひろ
山田 昌弘 (中央大学文学部教授)

男性学の新展開



■ 田中 俊之 著
■ 青弓社
■ 2009年初版
■ 1,600円(税別)

1990年代、いわゆる「男性学」(女性学との非対称性を意識して、最近、男性学・男性性研究=men & masculinities studiesとぼくは呼ぶようしている)が、国際的に大きな広がりを見せた。しかし、不思議なことに日本のアカデミズムにおいては、この動きにほとんど対応する反応が生じなかつた(そもそも女性学やジェンダー研究についても、国際比較すると、日本では驚くほど鈍い反応しか生み出さなかつたのだが)。

しかし、ここ数年、日本の学術分野においても男性学・男性性研究の動きが少しずつではあるが本格的に広がりつつある。本書、田中俊之さんの『男性学の新展開』は、おそらく、こうしたアカデミズム分野での男性学・男性性研究の新たな広がりを示す1冊だろう。

田中さんは、まず、男性学・男性性研究の位置づけを行ない、さらに、それが研究対象としてきた「男性問題」を整理した上で、R.コンネルのいう「男性性の複数性」「ヘゲモニックな男性性」という理論

的視座に着目する。この視点から、田中さんは、日本の男性と労働の問題、定年問題、さらにオタクやセクシュアリティ、男性性と恋愛・結婚といった具体的な課題をめぐって考察をしていく。読みやすいコンパクトな1冊だ。

ヘゲモニックな男性性

イタリアの思想家A.グラムシのヘゲモニー論からヒントをえて、R.コンネルが生み出した概念。男性性は固定的なものではなく歴史・文化の違いや階層・エスニシティなどによる多様性をもっている(「男性性の複数性」)。他方で、男性の支配的地位や女性の従属性は、歴史・文化・階層・エスニシティを通じて共通している。注意すべきは、ヘゲモニーとは、単に一方的な強制的支配を意味しないということだ。この概念は、(男性も含む)従属する側の「同意」形成を含む支配・従属のダイナミックなプロセスを視野に入れたものだからである。

いとう ひとみお
伊藤 公雄 (京都大学大学院文学研究科教授)

ジェンダーで学ぶ言語学



■ 中村 桃子 編著
■ 金水 敏、熊谷 滋子、因 京子、水本 光美、佐藤 韶子、岡本 成子、マリィ・クレア、宇佐美 まゆみ、齊藤 正美、丹羽 雅代、林 礼子 著
■ 世界思想社
■ 2010年初版
■ 2,200円(税別)



「女／男はこうするのが当然」というジェンダーに関する「当たり前」は、私たちの日常の思いに深く沁みこんでいる。本書は、こうしたジェンダーの「当たり前」は、「ことば」によって作り出されている面が大きいことに着目する。

「女(男)ことば」や方言の歴史、マンガ、ドラマ、小説といったメディアにおけるジェンダー表現のありよう、言葉づかいとアイデンティティとの関係、社会を変革していく力としての言語をテーマとする各章は、ことばとジェンダーとの関わりがいかに密接なものかを十分に物語っている。

世間やメディアの常識は女性に丁寧で控えめな「女ことば」を押しつけるが、マンガの女性主人公はときに「女ことば」を戦略的に逆用して、抵抗や自己主張を展開する(第4章)。また、若い女性は、親しい同士では「男ことば」を使って、多様なアイデンティティを構築している(第7章)。ジェンダー表現は、強制された「女(男)らしさ」への追随にとどまらないのである。

とは言うものの、選択的夫婦別姓の動きに対して、「結婚したら夫の姓になるのが当たり前」というように、姓という名前(ことば)とジェンダーとの関連における男性優位を固持しようとする勢力が相変わらず根深いことも忘れてはならない(第12章)。

女ことば／男ことば

日本語は他の言語よりも女性らしい表現、男性らしい表現が多いとよく言われる。確かに「わたし」、「ぼく」といった自称詞や「わ」、「ぞ」等の終助詞の使い方を振り返るとつい納得してしまう。しかし、本書では、こうした常識的な見方を覆す歴史的、実証的研究が展開されている。それによれば、「女(男)ことば」は明治以降の近代化の産物であり、現代においては言葉づかいの性差は弱まっているにもかかわらず、TVドラマやマンガ等のメディアで「女(男)らしさ」を強調するために、ことさら多用されているというのである。私たちも、自分自身と身の回りの実際の言語使用を見つめる必要がありそうだ。

かどくら まさみ
門倉 正美 (横浜国立大学留学生センター教授)

Poor Women in Rich Countries: The Feminization of Poverty over the Life Course



■ Gertrude Schaffner Goldberg 編著
■ Diane Sainsbury and Ann Morisssens, Claude Martin, Ute Klammer, Jane Millar, Patricia Evans, Enrica Morlicchio, Elena Spinelli, Kimiko Kimoto, Kumiko Hagiwara 著
■ Oxford University Press
■ 2010年初版
■ 3,862円(税別)



(仮邦題『豊かな国の貧しい女性——あらゆる年齢層に広がる貧困の女性化』)

本書は、カナダ、フランス、ドイツ、イタリア、日本、スウェーデン、イギリス、アメリカ合衆国における貧困の女性化現象を検証した論文集である。母子家庭と1人暮らしの高齢女性(未婚、離婚、死別、別居)に焦点を当てている点が本書の特徴である。

貧困の女性化の要因は、就業状況(女性の就業率、性別による職域分離、非正規就労率、就業・失業率など)、ジェンダー均等化政策の有無(雇用機会均等法、アファーマティブ・アクション政策、仕事と家庭の両立支援策)、福利厚生(子育て支援、育児休業、住居手当)とリンクしていると、著者らは指摘する。さらに、人口全体に占める母子家庭の割合や移民、マイノリティ、差別された集団の割合など、人口統計上の特徴が、貧困のリスクを持つ女性人口の規模を決定することを示している。

1990-2010年、日本は経済不況にみまわれ失業者の数が増加した。この間、日本は他の先進国同様、新自由主義経済に基づく構造改革を行っている。この時期に「貧困が再発見」され、女性の貧困が可視化したと、著者木本、萩原は指摘する。日本

の母子家庭の数は他の先進国に比べ少ない。しかし、母子家庭の経済的困窮は際立っている。この背景には、社会福祉の手薄さ、労働市場における女性の賃金の低さ、正規就業と子育ての両立困難などの状況がある。また、日本は世界で最も高齢化率が高く、1人暮らしの高齢女性の人口割合が高い。貧困の女性化と「豊かな国の貧しい女性」の問題は、まさに現代日本の問題でもある。

貧困の女性化

社会学者ダイアナ・ピアースが1970年代後半に造った言葉。貧困は女性に圧倒的に多くあらわれ、女性世帯主の家庭は男性世帯主の家庭より貧しいなど、富や資源へのアクセスに際し男女格差が存在することをいう。また、経済の変化が及ぼす影響は男女間で異なり、女性の方により深刻にあらわれる過程をいう。この用語はもともとアメリカで用いられていたが、近年他の国にも適用可能か比較研究が重ねられている。

ヴェラ・マッキー (ウーロンゴン大学文学部教授)